【35】

氏　名（国籍）	俞（ゆ）　在真（ぜぇじん）（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　3582　号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	**堀辰雄初期作品研究** －モダニズムの受容と変容－

主　査	筑波大学教授		新保邦寛
副　査	筑波大学教授		犬井善壽
副　査	筑波大学教授	博士（人文科学）	清登典子
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	松本　肇
副　査	筑波大学助教授		青柳悦子

論文の内容の要旨

堀辰雄について，二十世紀の西欧文学に深い影響を受けつつもモダニストにはならなかったというのが，いわば定説であった。それは，日本のモダニズムが「新興芸術派」に代表される軽薄な文学の謂であったため，堀自身も批判的な立場をとっていたからである。現在，堀の初期作品を再評価する動きがあり，それによってモダニズムとの関係が改めて問い直されてはいるものの，関東大震災後に立ち現れたモダン都市の感性が窺える，といった程度の評価に過ぎない。大切なのはモダニズム運動の本質を明らかにすることであり，問わねばならないのは，堀がそれを自らの問題として引き受けていたか否かである。本論文は，そうした課題に取り組み，堀辰雄の文学史上の位置付けを正すことをもって，日本のモダニズム運動を再定義しようと目論むものである。

本論文の構成は，以下の通りである。

序章

第一部　第一章　習作期の文学的模索と方向性　－「風景」論－

　　第二章　アンリ・ポアンカレ受容　－「芸術のための芸術について」を中心に－

　　第三章　パブロ・ピカソ受容　－モダニズムの指標－

第二部　第一章　昭和初期の超現実主義と堀辰雄　－「眠ってゐる男」論

　　第二章　堀辰雄初期文学の〈遊戯性〉－「手のつけられない子供」と「羽掃き」－

　　第三章　堀辰雄のモダニズムとラファエロ　－「聖家族」論－

結章

西欧モダニズム運動は，科学の発展に伴う世界観の変容に連動している点に本質があり，文学・絵画・音楽などの各領域の壁が取り払われ自由に交渉を繰り返す芸術運動であった点に特徴がある。それ故第一部では，主として科学思想と絵画の受容について考察する訳だが，それに先立って習作期の作品『風景』の分析

を行っている。『風景』には，写実主義の絵画における写実を支えているのが遠近法といういわばレトリックに過ぎず，現実そのままを認識しようとすると，むしろそうした写実概念を越えた世界を捉えることになる事態が報告されているからである。こうした思考の背後にアンリ・ポアンカレの受容があったとする訳だが，ポアンカレは，相対的な時間及び空間認識と，人間の感覚を重んじる非ユークリッド幾何学を用いて四次元世界のモデルを提示することに成功し，アインシュタインの世界観の変容とピカソの絵画革新を共に導いた科学思想家である。数学者を志したこともある堀は，ポアンカレの思想に促され，例えば夢を用いることで日常的現実を越えた現実の創造に思い至り，その具体的な方法をピカソの絵画に仰ぐことになるが，それは，ピカソが，ただ現実を再現することしか考えなかった絵画を現実を作り上げるものに変えてしまったからである，とする。

第二部では，具体的な作品分析を行うことでモダニズムの本質や特徴がいかに方法化されているかを検証しようとする。『眠ってゐる男』は夢をテーマとする典型的なモダニズム作品だが，夢を解体され再構築された現実と捉えるユニークなものであった。日本の「超現実主義」が極端な理知主義として展開されたため，西欧シュールリアリズムが夢を無意識の反映と見做す点が見えなくなっていたのである。また西欧モダニズムは虚構を重視するため遊戯性を強く打ち出す傾向があるが，堀の『手のつけられない子供』は正しくそうした作品である。しかもその改作『羽掃き』では，自らが作り出した虚構の世界をあくまで信じようとする方向性が強められていて，堀がモダニズムの思考に深く囚われていく様が見出せる。さらに堀の事実上の処女作と見做されてきた『聖家族』は，心理主義小説に戻っているように見える。しかしこの作品のライトモチーフとも言える同名のラファエロの絵画は，超越的な理念を体現するものであるが故に，登場人物の揺れ動く心理が相互に錯綜しつつ進行するプロットと矛盾し，そうした心理の綾そのものを最終的には遊戯と化すことになると言う。正にこの小説の本質はモダニズムそのものであり，こうした韜晦はピカソの芸術上の変遷を受け止めた結果であるとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

堀辰雄の『聖家族』以前の作品は，習作レベルとして顧みられないか，せいぜいモダンな都市風俗を描く作品ぐらいにしか評価されてこなかった。著者は，それが従来の日本文学研究のモダニズムに対する無理解や，軽薄な風俗小説に過ぎなかった日本のモダニズム文学を準拠枠にした結果起こったと分析し，何より先ず，モダニズムの本質と特徴を示し，それが日本でどのように展開されたかを明らかにする必要があると主張する。その結果，モダニズムの本質は二十世紀の科学によって齎された世界観の変容に伴う芸術運動という点にあったこと，そうした思想を唱導したフランスの科学思想家アンリ・ポアンカレの著作が明治の頃より日本で紹介され，哲学や文学に多大な影響を与えたこと，堀辰雄も早くから受容し，芸術論構築の基礎にしていたことなど，目覚ましい事実を証明してみせる。

さらに著者は，そうして手に入れたモダニズムの芸術観が単に習作期の創作方法として生かされたのではなく，堀辰雄の文学全体を支配するものであったことを，例えば，彼の文学的名声を確立した『聖家族』や，『羽掃き』の改作の方向性を分析することをもって示唆している。つまり堀文学の本質が本格的なモダニズムの展開と見做すことが可能であり，そのことは，日本におけるモダニズム運動そのものの再検討を促すことに繋がり，延いては近･現代文学史の枠組みを動かす可能性も秘めていることになる。学界に少なからぬ波紋を投ずる研究であることは疑いない。

とはいえ，瑕瑾がない訳ではない。第一部の，ポアンカレと共に堀のモダニズム観を支える二本柱とも言うべきピカソ受容についてであるが，堀の言及が少ないこともあってやむを得ない部分はあるものの，考察が手薄である。そのため，ピカソ受容が大きな問題となる第二部の『聖家族』論が，ややピントが惚けてし

まった嫌いがある。モダニズムが堀文学全体を貫く問題である点を強く打ち出すためにも，直接的資料に頼らずとも考察を深めることの可能な方法を模索してほしかった。

しかし，それは今後の課題というべきかもしれない。実証的な手続きを守り，確実な論理を積み重ねることで，ここまで画期的な説を提出した点を，何よりも評価すべきであると思う。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。